

音読

長く親しまれている古文の文章の言葉のひびきを味わいましょう

年  
名前

古文2

『枕草子』は、四季の自然を観察したり、日常生活などを振り返って感想や意見、見聞きしたことが書かれています。言葉のひびきとともに、情景を想像しながら読みましょう。

枕草子

まへくらのそうじ

清少納言

せいしょうなごん



秋は夕暮。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、  
 鳥の寝ころへ行くとして、三つ四つ、二つ三つなど  
 飛びいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いと小  
 く見ゆるはいとをかし。  
 日入りはてて、風の音、虫の音など、はたいふべきにあらはず。  
 冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらはず。  
 霜のいと白きも、またさらでも、いと寒きに、  
 火などいそぎおこして、炭もてわたるもいとつきつきし。  
 昼になりて、ぬるくゆるびもて行けば、  
 火桶の火も白き灰がちになりてわろし。

〔解説〕

秋は夕暮れがよい。夕日が山の端にとても近づいたところに、からすが巢へ行くところ、三羽四羽、二羽三羽などと飛び急ぐのさえも、しみじみとしたものを感じる。まして、かりなどが連なるとても小さく見えるのは、とても風情がある。夕日がしらずで、風の音、虫の音などが聞こえるのは、何ともいえない。

冬は早朝がよい。雪が降っているのは言うまでもない。霜がとても白いのも、またそうでなくても、とても寒い朝に、火などを急いでおこして、炭を持ち運ぶのも冬の朝にふさわしい。昼になり、寒さがゆるんでいくと、火おけの炭も白い灰ばかりになってきてよくない。

読んだ回数	( )	で	囲む	( )
11	1			
12	2			
13	3			
14	4			
15	5			
16	6			
17	7			
18	8			
19	9			
20	10			

	よい姿勢	よく聞こえる	すらすらと読める	暗唱
私の評価 ( . . )				
先生の評価 ( . . )				

( とてもよい                      よい                      もう少し )